

〔史料紹介〕

徳川慶勝自筆の能楽史料について

野村 弥生

はじめに

書誌情報

(一―一) 宝生流舞付

(一―二) 宝生流舞付

(二) 宝生流謡曲

(三) 謡曲廻順

(四) 必携(宝生流謡書抜)

解題

註

〔翻刻〕

凡例

はじめに

本稿は、徳川林政史研究所が所蔵する尾張徳川家十四代慶勝(一八二四)

徳川慶勝自筆の能楽史料について

八三自筆の能楽関連の史料を翻刻・紹介するものである。尾張徳川家(以下、「尾張家」と略称する)では各種・各流派の曲目の上演に応じるために、様々な能・狂言面や装束・小道具が備えられた。現在、徳川美術館には尾張家伝来の能・狂言面が約百六十面、装束がおよそ七百点、そのほか、楽器や舞台で用いられる作り物など、膨大な量の能道具が伝わる。ただ、特定の人物が所用したことがわかる能道具は少なく、所用が判明するのは徳川家康(一五四三～一六一六)所用と伝わる能面⁽¹⁾、豊臣秀頼(一五九三～一六一五)・尾張家初代義直(一六〇〇～一五〇)所用の「菊田蒔絵小鼓胴 附葵紋扇 散蒔絵鼓箱」⁽²⁾、義直所用の「大根巴蒔絵小鼓胴 銘客来 附三番叟蒔絵鼓箱」⁽³⁾、そして、慶勝所用の鎮扇⁽⁴⁾三十六点のみである。そのうち、慶勝所用と伝わるのは、「菊・牡丹図鎮扇」「金雲に花の丸図鎮扇」「金地振金雲形鎮扇」などの鎮扇で、多くの扇の地模様は「宝生五雲」と呼ばれる五つの雲の模様が表されることが特徴的である。「宝生五雲」は能の流派のひとつで、大和猿楽の外山座^(とびざ)を母体とする宝生流を象徴する文様で、慶勝が宝生流を重用していたことがわかる点で貴重である。

慶勝は、文政七年（一八二四）、尾張家の分家である美濃高須松平家十代義建の二男として誕生した。天保十二年（一八四一）に元服して「義恕」と名乗り、嘉永二年（一八四九）に家督を相続して尾張家十四代当主となった。翌月十二代將軍家慶から諱の一字「慶」を賜り「慶恕」と名乗り、万延元年（一八六〇）には「慶勝」と改名した（本稿では「慶勝」と統一する）。幼少のころから読書を好み、武芸も嗜む賢明な人物として評価が高かったと伝わる。また、学問の記録や日記を細かに書き残し、さらには蔵書目録を慶勝自身が作成するなど、慶勝は几帳面で整理好きな性格だったといえる。⁶⁾ここに紹介する慶勝自筆の能楽関連史料四件「宝生流舞付」「宝生流謡曲」「謡曲廻順」「必携（宝生流謡書抜）」（いずれも徳川林政史研究所蔵）においても、能の曲目や慶勝の修練の記録が実に細かに記録されている。また、史料名にあるように、徳川美術館が所蔵する鎮扇と同じく、宝生流に関する史料であることがわかる。

尾張家に関する能楽史研究においては、江戸時代中期頃までの演能の記録の紹介や、明治時代以降の名古屋能楽界における動向の研究が主であり、慶勝自身と能楽との関わりについてはあまり触れられてこなかった。⁸⁾しかし、今回紹介する慶勝の時代における能の修練について手記した本史料四件は、宝生流を好んだ慶勝の能への向き合い方がわかる点で貴重であり、慶勝の時代の能楽史を解明する端緒として紹介する。

書誌情報

(一) 宝生流舞付(旧蓬左文庫史料二二六―一三六) 二冊

- | | | | |
|------|-----------------------------|------|-----------------------|
| 表紙 | 横本、袋綴装四つ目綴じ。 | 表紙 | 横本、袋綴装四つ目綴じ。 |
| 法量 | 薄青地に白地扇模様。薄い絹で表装。 | 法量 | 薄青地に金霞地扇模様。薄い絹で表装。 |
| 外題 | 中央、「又新」印(朱文方印)。 | 外題 | 右肩、「寶生流舞付」(墨書)題箋貼付。 |
| 内題 | 左肩、「寶生流舞付」(墨書、慶勝筆)。 | 内題 | 「寶生流舞付」(墨書、慶勝筆)。 |
| 筆者 | 見返し中央、「寶生流舞付」(墨書、慶勝筆)題箋貼付。 | 筆者 | 徳川慶勝 |
| 紙数 | 徳川慶勝 | 紙数 | 全十三丁(本文七丁、白紙三丁、半紙一枚)。 |
| 成立年代 | 全十三丁(本文六丁半紙一枚、白紙六丁、奥書半紙一枚)。 | 成立年代 | 江戸時代 十九世紀 |
| | 江戸時代 十九世紀 | | |
- (二) 宝生流謡曲(旧蓬左文庫史料二二六―一三七) 一冊
- 表紙 横本、袋綴装五つ目綴じ。

白地にレリーフ模様金箔押。

外題 右肩、「宝生流謡曲」(墨書)題箋貼付。

内題 「寶生流謡曲」(墨書、慶勝筆)。

筆者 徳川慶勝

紙数 全十三丁(本文十丁、白紙三丁)。

奥付 「源慶恕(花押)」

成立年代 嘉永二(万延元年(一八四九)六〇)頃

(三) 謡曲廻順(旧蓬左文庫史料二二六一―二三八) 一冊

法量 縦三二・五糎、横一一・二糎。

表紙 横本、袋綴装大和綴じ。

共 紙表紙。

外題 中央、「謡曲廻順」(墨書、慶勝筆)。

内題 なし

筆者 徳川慶勝

紙数 全十三丁(謡順)本文四丁、白紙三丁半紙一枚、「仕舞」三丁)。

成立年代 江戸時代 十九世紀

(四) 必携(宝生流謡書抜)(旧蓬左文庫史料二二六一―二五六) 一冊

法量 縦七・六糎、横一八・七糎。

表紙 横本、袋綴装四つ目綴じ。白地。

外題 左肩、「必携」(墨書、慶勝筆)。

内題 なし

筆者 徳川慶勝

徳川慶勝自筆の能楽史料について

紙数 全十二丁。

成立年代 江戸時代 十九世紀

解題

能の修練は、まず能の台本である謡本をもとに「謡」の稽古をし、次に基本の所作を習得するために「仕舞」を習うことが通例である。「舞」の様々な所作は「型」といい、これを「型付」と呼ばれる書物には能の登場人物ごとに定められた所作を中心に、演じ方や使用する能道具などが具体的に記される。一般的な名称は「型付」だが、江戸時代中期以前の名残から「仕舞付」「舞付」「手附」ともいわれる。能の部分奏演である舞囃子や仕舞に限定した内容の「型付」もあり、現代でも謡本と同様に一般の人の稽古用テキストとして各流派のものが刊行されている。「囃子仕舞手附 宝生流」(名古屋市蓬左文庫所蔵)⁽¹⁰⁾のように、曲名の次に詞章が書かれ、要所となる詞章に「立(立ち上がる)」「正(舞台の正先へ向かう)」「サシ(サシ)という所作をする)」「拍子七(拍子)を七回踏む)」など役者の所作が付記されていることが多い。能を舞う際に必要な手引書の役割を担っている。

「(一)宝生流舞付A」は六十五曲が収められているが、先に述べた一般的な「型付」にあるような舞の所作は示されておらず、曲名ごとに数種類の記号が書かれているのみである。能の舞を現代と同じように修練したと仮定すると、謡にあわせて能の一部分を一人で舞う仕舞から、囃子(楽器)が加わる部分奏演の居囃子・舞囃子、ワキ方・狂言方や囃子方などすべての役者が揃う袴能(能装束をつけず紋付袴で行う)・能の順に修練するのが基本となる。「(一)宝生流舞付A」に書かれた記号は曲名の上と下に様々あ

り、いずれも修練の過程で付記されたものと考えられる。本稿では慶勝の修練記録を推察するうえで、曲名の下に記された記号に着目した。本史料は「型付」に分類されるため、「謡」ではなく「舞」の修練記録であると推測できることから、「・」は仕舞、「●」は舞囃子、「□」は袴能、「○」は能と仮定した。一曲目の「高砂」は左記のように記される。

●高砂 ●・□○

「仕舞、舞囃子、仕舞、袴能、能」の順に修練したということを示唆する。

「(一)宝生流舞付B」は、「(一)宝生流舞付A」より数曲増減し七十曲が収められている。一般的な「型付」のように所作が示されるのではなく、曲名の次には詞章の謡出しが書かれる。また「(一)宝生流舞付A」にみられるような記号はない。

「(二)宝生流謡曲」は七十七曲が収められ、「(一)宝生流舞付A・B」と曲名・順序が多少異なるものの、曲名の次に詞章の謡出しが書かれる点で「(一)宝生流舞付B」と体裁が近似している。奥書には「源慶恕(花押)」と署名があることから、慶勝が慶恕と名乗っていた、嘉永二年(一八四九)から万延元年(二八六〇)までの間に使われていた可能性が高い。

「(三)謡曲廻順」の「廻順」は、管見の限りでは、能では用いられない用語である。曲名と、修練の記録と思われる印が捺されている。前半五十一曲は「謡順」という内題、後半の六十曲は「仕舞」と内題が記されているため、稽古をつけるべき順番に曲名を記し、稽古をつけたのちに覚えとして印を捺したものではないかと考える。稽古をつけた順ではなく、稽古

をつけるべき順が示されていることは、先に紹介した「(一)宝生流舞付」・「(二)宝生流謡曲」とは記録の趣旨が異なる史料であり、体裁も大きく異なる。「慶勝日記」⁽¹⁾(徳川林政史研究所蔵)をはじめ同時代の史料を比較参照することで、作成された時期や他史料との関連性を明らかにしていきたい。

「(四)必携」には七十四曲が収められている。最後の丁に「宝生流謡書抜」とあること、また、「(一)宝生流舞付」・「(二)宝生流謡曲」とは異なり、書き出した詞章が長い曲があること、さらに、三曲目に「開口」⁽²⁾が収録されていることから、「(四)必携」は、修練した謡を書き出し備忘にしたのではないかと思われる。「開口」は都度新しく作られるため記憶することが難しく、すべての詞章が書き込まれている。「開口」は將軍家や禁裏、本願寺など公儀の祝賀能に多く演じられたため、慶勝日記や同時代の記録や史料から、本冊子の製作年の検証もできないだろうか。

江戸時代に能が式楽と定められ、尾張家では様々な能道具が備えられた。尾張家初代義直はシテ方に加え小鼓を修練し、能を愛好した二代光友は「江口」を好んだと伝わる。のちの時代も尾張家の演能記録はあるものの、先述した通り当館の所蔵品のうち所用者が極められている能道具は数が少ない。本稿では、慶勝自筆の四件の能楽史料を紹介するにとどまったが、今後は、各史料において、選曲や曲順、書かれた内容を慶勝日記や同時代の史料から検証し、鎮扇・能楽史料とともにまとめた数の史料が遺る慶勝と能の関係について明らかにすることを課題としたい。

註

(1) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 別編 文化財三 彫刻』(愛知県、二〇一三年)。「駿府御分物御道具帳」のうち、尾張徳川家に伝えられた「元和四年

午十一月朔日」の奥書をもつ『駿府御分物之内色々御道具帳』に記された能面に該当する可能性があるのは、「猿癡見」(能面二八一)・「平太」(二面)能道具三三二または三三三)・「泥眼」(能道具二九)・「髭小尉」(相模尉) (能道具二八六)・「檜垣女」(能道具四七)の五面である。そのほか、「笑尉」(能道具三三二)・「小尉」(能道具二七)・「蛙」(能道具二五)・「蛙」(能道具三〇一)が、「駿府御分物」である可能性が指摘されている。

(2) 能道具三。蠟色に仕上げられた胴に苅田文様すなわち稲の切株が絵梨子地で表される。胴の内部に「金春(花押)」、「上 秦就氏(花押)」と朱書きがあり、江戸時代初期の製作と思われる葵紋扇散時絵鼓箱に収められている。慶長十六年(一六二一)三月二十八日、二条城において徳川家康と豊臣秀頼との会見が行われた後、秀頼から尾張家初代義直へ贈られた。

(3) 能道具一六。大根、巴紋、雪輪紋が絵梨子地と金平時絵で表される。胴の内側に、「大倉長右衛門」と金粉字銘と花押があり、「翁」の演能風景が金時絵で表される箱に収められている。

(4) 能・狂言の小道具。扇の一種で、面・装束をつけず紋付袴なしし袴で仕舞等を舞うときに用いる扇をいう。竹製の骨に彩色を施した紙が張られている。親骨の形状と描かれた模様は、シテ方五流をはじめワキ方・狂言方・囃子方にわたり、それぞれ各流派の決まりがある(『能楽大辞典』、筑摩書房、二〇一二年)。

(5) 能道具七九―一〇三、八〇―一〇六(鎮扇三十本、舞扇四本、練習用の革張扇二本)。

(6) 慶勝の事績については左記を参考にした。

- ①原史彦執筆・加藤祥平一部加筆『徳川慶勝―知られざる写真家大名の生涯―』(徳川美術館、二〇一三年初版、二〇一八年三版)。
- ②藤田英昭「嘉永・安政期における徳川慶勝の人脈と政治動向」(『金鯢叢書』四

四、徳川黎明会、二〇一七年)。

③羽賀祥二・名古屋蓬左文庫編著『名古屋と明治維新』(風媒社、二〇一八年)。

(7) 山川曉「尾張徳川家演能の研究」(二大蔵七左衛門家蔵「能囃子組」にみる尾張徳川家の演能) (『金鯢叢書』二四、徳川黎明会、一九九七年)。

飯塚恵理人「近世能楽史の研究―東海地域を中心に―」(雄山閣出版、一九九九年)。

清水禎子「金春八左衛門安住と藤田流の流儀筋入組一件 尾張藩の能楽について」(『尾張藩社会の総合研究』五、清文堂、二〇一二年)。

(8) 慶勝自筆の能楽関連史料四点のうち、「宝生流謡曲」のみ、飯塚氏により左の通り翻刻紹介されているが、四点一括での紹介はなされていない。

飯塚恵理人「(資料紹介) 徳川慶勝筆『宝生流謡曲』について」(『東海能楽研究会年報』二八、二〇二四年)。

(9) 能の譜本の一つ。詞章を掲げ、その右側に旋律や拍子を指示する符号などを示す。室町末期に謡が能から独立した音曲として普及、流行するにつれ、稽古本としての謡本が多く書写されるようになった。刊年を明記した最初の謡本は元和六年(一六二〇)の奥付と親世大夫暮閑(九世親世身愛)の署名のある「元和卯月本」で、五流通じて最初の家元公認の謡本である(『能楽大辞典』筑摩書房、二〇一二年)。

(10) 旧蓬左文庫蔵書四五―三。

(11) 旧蓬左文庫所蔵史料一二六。

(12) 特殊な奏演形式。脇能の冒頭にワキが当代を賛美する新作の謡を独吟すること。儒者や公家が新しく作った詞章にワキ方が節付けをし謡われる習慣があった(『能楽大辞典』筑摩書房、二〇一二年)。

(徳川美術館 学芸員)

〔翻刻〕

凡例

- ・「(一一)宝生流舞付A」は手書きのため近似した記号にも細かな違いがあるが、筆者は「・」「●」「◎」「□」の四種に分類した。また、曲名の上から、朱の丸印が捺されている曲がある。極力、原文の通りの位置に「○」を示した。
- ・「(一一)宝生流舞付B」の曲名の上に付された印(すべて朱書き)は「・」「●」「○」で示した。
- ・「謡曲廻順」の曲名の上下には灰色と朱色、二色の丸印が捺されており、朱書きの印は「●」、灰色の印は「○」にて示した。ただし、曲名の下に捺された印の並び順は、現段階では不明であるため、それぞれの数を、曲名の下に示した。
- ・朱で書かれた曲名・記号・印については、ルビ位置に「(朱書)」と記した。
- ・繰り返し記号は本文の通りに翻刻した。
- ・底本の文字の誤りはルビ位置に正しい字を記したが、訂正できないものはルビ位置に「(ママ)」とした。
- ・改行は本文の改行に従った。
- ・(一オ)は本の二丁表を、(一ウ)は一丁裏を示し、丁の最後に記した。
- ・漢字の字体は原則として本文の通りにし、常用漢字に改めなかった。異体字もなるべくそのまま生かした。
- ・平仮名、片仮名は原則として本文通りにした。助詞の「ハ・ニ」については片仮名のままとした。

(一一一) 宝生流舞付A

寶生流舞付

(表紙)

寶生流舞付

(見返し)

〔朝政之餘暇〕(朱文長方印)

高砂

田村

熊野

熊坂

須万源氏

(1才)

加茂

八嶋

松風

芦刈

弓八幡

(1ウ)

嵐山

盛久

羽衣

藤

鵜飼

(2才)

枕慈童

巴

藤戸

舟辨慶

三山

(2ウ)

龍田

海入

百萬

春日龍神

老松

(3才)

志賀

六浦

紅葉狩

安宅

吉野静

(3ウ)

葛城

小督

善知鳥

玉葛

胡蝶

(4才)

桜川

敦盛

東北

雲雀山

是界

(4ウ)

笠之段

加茂ロンキ

阿漕

融

大江山

(5才)

鶴亀

山姥

卷絹

養老

狸々

(5ウ)

三輪

花筐

前花筐

忠度

邯鄲

(6才)

●女メ郎ロウ花カ (宋書) (宋書)

●天テン鼓コ (宋書) ○ (宋書)

●西セイ王ワウ母モ (宋書) (宋書)

●小コウ口コウ (宋書) (宋書)

●杜ト若ニョク

(6ウ) ○ ○

●鉄テツ輪リン (宋書)

●夜ヤ鳥ニョウ (宋書)

●西セイ行コウ桜オウ (宋書) (宋書)

●金キン鐘ショウ見ケン (宋書) (宋書)

●夜ヤ討トウ曾ソウ我ガ

(7才)

〔盛セイ斎サイ〕〔朱シュ文モン方ホウ印〕

〔忠チュウ堂ドウ〕〔朱シュ文モン方ホウ印〕

(一一二) 宝生流舞付B

宝生流舞付

(表紙)

寶生流舞付

●高砂

・然れども此松は

・高砂や

●田村

・さそなゝにしほゝ

・然るに夜の

●熊野(朱書) 右

花前に鳥も

●熊坂

・十六七

●須磨源氏

いとどしく

(1オ)

須磨の浦

●加茂

石川や

加茂の山波

●八嶋

・其時兼ふさ

●松風(朱書) 右

・あら恋しや

芦刈

あるは男山

●弓八幡

しかるに神宮

・みやこにかへり

(1ウ)

●嵐山

しやのいわや

盛久

ありかたし

●羽衣(朱書) 右

・然るに月宮殿

藤(朱書) 前
跡前(朱書) 右左

・沖つかせ

鶉飼

・しめる

●枕慈童

・此妙文の

●藤戸

(2オ)

待うたひより

・うしや思出し忘むと

●舟弁慶

伝聞

・あら逆

●三山(朱書) 右

・あれ御覽せよ

●龍田

抑當国寶山に

●海人

・一ツのりけむ

●百万

牛羊

(2ウ)

●春日龍神

神託

・然るに入唐渡天といつ(マ)

老松

先は社譚(マ)の

●志賀

然れば其御時にい

六浦

まつ青陽

●紅葉狩

・林間

●安宅

・実にこれも心得たり

(3才)

●吉野静 右

然るに彼判官な

●葛城

おりから雪も

●小督

たとへをしるも

是迄なりや

●善知鳥

・とても渡を(マ)

玉葛 (宋書) 右

実もうしう

●胡蝶 (宋書) 右

(3ウ)

・人とはいかて

●桜川

・岸花紅

●敦盛

然るに一門

東北

故

●雲雀山

かむとう

是界

妙

笠ノ段

・波濤海辺の大宮なればあれ御覽せよ

(4才)

●阿漕

うしみつ

●融

・うつらなくなる

・いそまくら

●大江山 右

・御肴

鶴亀

千代乃

山姥

遠近の

●卷絹 (宋書) 右

・されは楽む

(4ウ)

養老

夫行川

いゝもあへねは

●狸々 右

・潯陽の

三輪 (宋書) 右

中にも此しきしま

●花筐

おそろしや

・かたしけなき

●忠度

なかにも此忠のりは

●邯鄲

(5才)

我宿の

女郎花

邪いむのあき

天鼓

うちならず

おもしろやさしもけに(マ)

西王母 (宋書) 右

いろいろの

小塩

思ふ事いわて唯にやみぬへき

春日野の (宋書) 右

杜若 (宋書) 右

むかし男うひかむりして

(5ウ)

なら京 春日の里にし

るよしゝてかりにいにけり

君のめくみの深き故

●かな輪(マ)

大小の神祇

夜鳥(マ)

東三條

西行桜 右

九重にさけとも花の

八重桜

しかるに花の名高は

すはや敷そふ時の鼓

あら名残おしの

(6オ)

花の影より明そめて

松虫

あしたに落花を踏み

相伴なつていつ

然は花鳥遊樂の瓊

蕊

俊成忠度

あれ御覽せよ

雲林院

先はかうきでんのほそ

●経政

いや雨にては

●弱法師(朱書)

(6ウ)

フシキヤ我盲目トナラサリシ【朱書】

●竹生嶋(朱書)

處は海ノ上

辨弁(マ)天(マ)ノ女體ニテ

●望月

●鳥追

打渡

舍利(朱書)

初段前

七ツ六ツ四ツ

初段ヲロシ

七ツ四ツ

二段目

(7オ)

樂

初段前

七ツ六ツ四ツ

初段ヲロシ

七ツ四ツ

二段メ

六ツ四ツ

二段ヲロシ

七ツ六ツ

七ツ四ツ一ツ

三段め

七ツ七ツ中ムスヒ

四段

七ツ四ツ

(7ウ)

(8オ)11オ 空白丁

櫻 乙

神 房

箕 徳

荒 甚

(11ウ)

(二) 宝生流謡曲

宝生流謡曲

(表紙)

寶生流謡曲

高砂

四海波

高砂尾上の鐘

然れとも此松

しかるに長能の詞

田村

白たへの

あら〜面白

さそな、にしおほ

普天の下

七人狸々

御子孫も繁昌

(1オ)

養老

長生の家

老をたに養なは、まして

さかりの人のみに薬と

なれはいつまでも御寿命も尽

ましきいつみそめてた

かりける

君は船

清経

このほとは

さては仏神

か、りける處に

三輪

(1ウ)

されとも此人

安宅

心なくれそ

東北

ところは

錦木

夫は錦木おほこへは

雲林院

先はかうき殿のほそとの

に人めをふかくしのひ心

の下すたれのつれ〜と

人はた、すめは我もはなに

心を染てともにあくかれ

(2オ)

出たるなり二月や

湯谷

花前に蝶も紛々

たる雪

四條

寺はかつら

鶉飼

しめるといまつふたてて

ふしの

蟻通

されは和歌のことわ

さは

凡おもつてみれば

(2ウ)

忠度

そも〜後白河院の

御宇に千載集を撰る

五條の三位俊成卿

承て

としは寿永の秋の頃

さもいそかわかりしみの

藤戸

扱は人の申しにも少しもた

かわさりけり

此しまを御恩にたま

はるほと御よろこひも

我故なれはいかなる恩を

(3オ)

もたふへきに

おりふし引しほに

紅葉狩

さなきたに人こゝろ

竹生嶋

處ハ海の上

辨弁天(マ)の女躰(マ)

三井寺

人々いかにと咎しに

月落鳥啼

阿漕

物の名も

はつかしや古しへを

(3ウ)

ふしきやさては

一樹のやとりをも

丑みつする

難波

いほうなる

あら〜面白のおむかくや

ときの調子にかたとりて

春鶯轉の楽をは

兼平

是ハ又浮世を渡る

船弁慶

浪風も

しかるにかうせむ

(4オ)

老松

さて松を太夫と

實盛

御前をたつてあたり

なる

とほる

詠やる

ゆきとのみ

芦刈

あれ御覧せよ

難波つに

是界

妙

(4ウ)

杜若

植置し

匂ひ移る

加茂

御たらしの

汲や心

抑王城

松風

恋草の

これはなつかし

西行桜

みわたせは

八嶋

(5オ)

さて慰

義経源平

桜川

岸花紅

実やとしをへし

さるにてもなにのみきゝて

はる〜と

海人

ひきあげたまへと

鞍馬天狗

はなさかは

蟬丸

花都

(5ウ)

狸々

よをもをつきし

龍田

としことに

神のみまへに

敦盛

しかるに一門

しかるに平家

烏頭

ところハ陸奥の

鹿を逐獵師

疑も夏たつけふの

是をしるしにと

(6才)

春日龍神

我をしれ

新宅(マゴ)

はなかたみ

我よりも猶物くるひ

源氏供養

(空白)

山姥

抑山姥は

一樹影一河流

小しほ

春日野の

花も忘れし

(6ウ)

女郎花

頼風其時に

つゝひて

盛久

有難し〜

唐船

陸にはふかくに

邯鄲

酌とも〜も

唱よもすから

百萬

牛羊

実や世世ことの

(7才)

自然居士

かうていの臣下に

花月

抑此寺は

絃上

そよや陸奥のち

かのしほかまは

里はなれ

されはこそはしめより

嵐山

しやうの岩や

神楽の鼓

雲雀山

(7ウ)

款冬あやまつて

おもへさくら色

やまふところの

須磨源氏

須摩の浦

あら面白の海原

熊坂

十六七

小鍛冶

(空白)

鶴亀

庭のいさこ

月宮殿の

(8才)

春栄

けふハ殊更最上吉日な

れは

俊成忠度

あれ御覽せよ修羅王の

六浦

月日経て

まつ青陽のはるの

八聲の鳥

弓八幡

松高き

桑の弓

然るに神后

(8ウ)

うつすや

経政

いや雨

胡蝶

人とはいはて夕暮に

四季

春夏秋の

三山

春はとしく

かつらき

としふるゆきや

ふる雪の

高間の原

(9オ)

車僧

面白の

七騎落

かくて時日を

藤

おきつかせ

ゑひら

山も

枕慈童

則此文菊の葉に

巻絹

しやうく殿マゴの

巴

(9ウ)

あはつのみきはにて

偕もよし仲の信

濃を出

小督

いさくさらは琴の

せめてや

小鹿なく

さか野

ところをしるも

唐帝の古も

木枯に

鉄輪

ことさらうらめしや

(10オ)

鍾馗

きうたひの

岩船

我は又下界にすんて

神をうやまひ

あるひは神よのかれ

いをうつし

守護し奉り

おすやからろのくうし

をのミちくるなみに

のつて八大龍王は南方マゴ

塩にひかれ

寶生流謡曲

(10ウ)

源慶恕書 (花押)

(11オ)

(二) 謡曲廻順

謡曲廻順

(表紙)

謡

能

仕舞

囃子

(1才)

謡順

- 弱法師(灰色印6個、朱色印0個)
- 正尊(灰色印3個、朱色印1個)
- 鉄輪(灰色印5個、朱色印0個)
- 烏帽折(灰色印3個、朱色印0個)
- 胡蝶(灰色印5個、朱色印1個)
- 邯鄲(灰色印6個、朱色印0個)
- 志賀(灰色印6個、朱色印0個)
- (2才)
- 照君(灰色印4個、朱色印2個)
- 夜討曾我(灰色印1個、朱色印1個)
- 嵐山(灰色印5個、朱色印1個)
- 加茂(灰色印5個、朱色印0個)
- 高砂(灰色印5個、朱色印0個)

●弓八幡(灰色印5個、朱色印0個)

●田村(灰色印5個、朱色印0個)

○羽衣(灰色印4個、朱色印1個)

(2ウ)

吉野静(灰色印5個、朱色印0個)

巴(灰色印5個、朱色印0個)

●葛城(灰色印5個、朱色印1個)

狸々(灰色印3個、朱色印0個)

春日龍神(灰色印5個、朱色印0個)

小督(灰色印5個、朱色印0個)

●鳥追(灰色印5個、朱色印0個)

忠信(灰色印0個、朱色印0個)

(3才)

●松風(灰色印1個、朱色印1個)

●雲雀山(灰色印4個、朱色印1個)

●国栖(灰色印4個、朱色印1個)

●望月(灰色印5個、朱色印0個)

●枕慈童(灰色印4個、朱色印0個)

○舟辨慶(灰色印4個、朱色印0個)

安宅(灰色印5個、朱色印0個)

●熊坂(灰色印4個、朱色印0個)

(3ウ)

●葵上(灰色印5個、朱色印0個)

●藤戸(灰色印5個、朱色印0個)

●阿漕(灰色印5個、朱色印0個)

●龍田(灰色印5個、朱色印0個)

●景清(灰色印4個、朱色印0個)

融(灰色印5個、朱色印1個)

●鳥頭(灰色印5個、朱色印0個)

●三井寺(灰色印5個、朱色印0個)

(4才)

蟬丸(灰色印1個、朱色印0個)

●三山(灰色印4個、朱色印1個)

●経政(灰色印5個、朱色印0個)

●舍利(灰色印4個、朱色印0個)

●絃上(灰色印5個、朱色印0個)

●竹生島(灰色印5個、朱色印0個)

兼平(灰色印4個、朱色印1個)

紅葉狩(灰色印2個、朱色印0個)

(4ウ)

須磨源氏(灰色印5個、朱色印0個)

○海人(灰色印4個、朱色印0個)

頼政(灰色印2個、朱色印1個)

百萬(灰色印2個、朱色印0個)

(5才)

(5ウ) 8ウ 空白頁

仕舞

高砂(灰色印7個、朱色印0個)

熊野(灰色印7個、朱色印0個)
雲雀山(灰色印7個、朱色印0個)
吉野静(灰色印7個、朱色印0個)
草紙洗(灰色印7個、朱色印0個)
藤(灰色印7個、朱色印1個)
羽衣(灰色印7個、朱色印0個)
胡蝶(灰色印7個、朱色印0個)
六浦(灰色印7個、朱色印0個)
西行桜(灰色印7個、朱色印0個)
小塩(灰色印7個、朱色印0個)
(9才)

杜若(灰色印7個、朱色印0個)
葛城(灰色印7個、朱色印0個)
雨月(灰色印6個、朱色印1個)
三輪(灰色印7個、朱色印0個)
大江山(灰色印6個、朱色印0個)
舟辨慶(灰色印6個、朱色印0個)
笠之段(灰色印6個、朱色印0個)
鶉之段(灰色印6個、朱色印0個)
玉之段(灰色印6個、朱色印0個)
笹之段(灰色印6個、朱色印0個)
蟬丸(灰色印6個、朱色印0個)
花筐(灰色印5個、朱色印1個)
鳥追(灰色印5個、朱色印1個)
籠太鼓(灰色印5個、朱色印1個)
国栖(灰色印6個、朱色印0個)
葵ノ上(灰色印6個、朱色印0個)
邯鄲(灰色印6個、朱色印0個)
龍田(灰色印6個、朱色印0個)
卷絹(灰色印4個、朱色印2個)
天鼓(灰色印5個、朱色印1個)
唐船(灰色印4個、朱色印2個)
枕慈童(灰色印5個、朱色印1個)
玉葛(灰色印6個、朱色印0個)
三山(灰色印6個、朱色印0個)
(10才)

鉄輪(灰色印6個、朱色印0個)
春栄(灰色印6個、朱色印0個)
紅葉狩(灰色印6個、朱色印0個)
山姥(灰色印6個、朱色印0個)
花月(灰色印6個、朱色印0個)
桜川(灰色印6個、朱色印0個)
百万(灰色印6個、朱色印0個)
八嶋(灰色印6個、朱色印0個)
清経(灰色印5個、朱色印1個)
敦盛(灰色印6個、朱色印0個)
弓八幡(灰色印6個、朱色印0個)
志賀(灰色印6個、朱色印0個)
養老(灰色印6個、朱色印0個)
難波(灰色印6個、朱色印0個)
西王母(灰色印6個、朱色印0個)
東北(灰色印6個、朱色印0個)
鶴亀(灰色印6個、朱色印0個)
三井寺(灰色印6個、朱色印0個)
源氏供養(灰色印6個、朱色印0個)
須磨源氏(灰色印6個、朱色印0個)
昭君(灰色印6個、朱色印0個)
笹之段(灰色印2個、朱色印0個)
籬(灰色印6個、朱色印0個)
(11才)

放生川(灰色印2個、朱色印0個)

(四) 必携

必携

(表紙)

高砂

四海波

高砂の尾上の鐘

然れども此松

しかるに長能

田村

白妙の

あらく面白

普天の下

開口

夫動なき殿すへる民

の力も君か為おしまぬ

時に相生の松の千年の

ことふきを聞へあけたる萬

(1オ)

人萬代迄の石すへハ

めてたかりける時とかや

(1ウ)

七人狸々

御子孫も繁昌御壽命

養老

長生の家にこそ

老をたに養は、まして

葉と人のみに葉とならば

何迄も御壽命も尽まし

泉そめてたかりけるけにや玉

水の水上すめる御代そとて

〇もたいの竹葉は陰や緑を重

らん其外まかきの萩花は林葉

の秋を汲なりや晋の七賢か楽

しみ劉伯倫が翫び唯此水に残

れり汲めやくみ葉を君の為に

ささけむ

(2オ)

君は舟臣は水

清経

さては仏神三寶も かりける

ところに

三輪

されとも此人よるはくれとも

安宅

心なくれそくれはとり

東北

所は九重の

錦木

夫は錦木きをはこへば

(2ウ)

雲林院

先はこきう殿のほそ殿に人目

を深忍び心のした簾のつれく

と人はた、すめは我も花に

こ、ろを染て共にあこかれ立出る

二月やまだよひなれと月は入

我らを出るこひじ哉抑日の本の

うちに名所と云事は我大

内にありかの遍昭かつらねし

はなの散つもるあくた川を

打渡り思ひしらすも迷ひ

ゆくかつける衣は紅葉重

緋の袴ふみしたき誘ひ

出るやまめ男むらさきの一

もと結のふし袴しをる、す

そをかいとつて信濃路や

(3オ)

その原しける木賊色のかり

きぬの袖を冠りのこしに

うちかつきしのび出るや二月の

黄昏月もはや入ていと

靡夜の降は春雨かをつるは

涙かと袖(マ)うちはらひすそ

をとりしをくすこくすと

たとりくも迷ひ行

をもひ出たり夜遊の曲

返す真袖を月やしる

夜遊の舞楽も時うつれば

名残の月も山あひのはそて

返すや夢の告の枕此物

語り語る夜も盡し松

のはの散うせず末の世迄も

なさけ知ることのはくさのかり

(3ウ) 　　そめにかくあらはせる古

の伊勢物語かたる夜も

すんから覚夢と也にけり

く

ゆや

花前に蝶(マ)も紛々たる

雪

四條五條

鶉飼

しめる続松ふり立て、

蟻通

されは和歌のことはさは神

世よりも始り今人倫に

凡をもつてみれば歌の心す

(4オ)

なほなるは是れもつて私

なし人代に及んで甚お

こる風俗長歌短歌せん

とをこんほんのたくひ是也

雑体ひとつにあらされは

源流漸しける木の花の

うちの鶯又秋の蟬の吟

の声何れか和歌の数な

らんされは今の歌

忠度

そもく後白河の院の御宇に

千載集を撰る五條の三位

俊成の卿

年は寿永の秋の頃

さもいそかわしかりしみの

心の花か蘭菊の

(4ウ) 　　藤戸

扱は人の申しも少しもたか

はさりけりあのほとりそといふ波の

此鳥を御恩(マ)に給るほと

御よろこひも我故なれば

いかなる恩をもとふへきに

折ふし引給

紅葉狩

さなきたに人心

竹生嶋

緑樹影しつんて

三井寺

人々いかにととかめしかは

(5オ)

あこぎ

物の名も

はつかしや古を

ふしきやさてハ

一樹の宿をも

うしみつすくる夜夢

難波

祝ふなる心そ白き曇

なきあまつひつきの貢物

はこふちまたや都路の直な

御代を仰むと関のとぎ

さで千里迄あまねく照す

日影哉く

兼平

是は又浮世を渡る芝(ママ)

(5ウ)

舟のほされぬ袖の水みな(ママ)

れさほの

船弁慶

浪風も

老松

惣松を大夫といふ事は

実盛

御前をたつてあたりなる

とほる

なかめやる

雪とのみつもりそきぬる

年月の春を向え秋を

そへ時雨る松の風までも

(6オ)

我身の上と扱てしる

しほなれ衣袖さむき浦

はの秋の夕かなく

芦刈

あれ御覽せよ御津の濱に

難波津に

是界

妙

杜若

うゑ置し

匂ひ移る

加茂

御たらしの

汲や心も

(6ウ)

抑是は王城を守る

松風

恋草の梅雨も

これはなつかし君こゝに

西行桜

みわたせは

八島

さて慰は

義経源平に

さくら川

岸花紅

実にやとしをへし

さるにても名にのみきゝて

はるはると

(7オ)

海人

ひきあげたまへとやく

そくし

鞍馬天狗

花さかはつけんといひし

山里のつかひは来り馬に鞍

鞍馬の山のくす桜手折

枝折をしるへにて奥も迷

はし咲きつゝく木かけに並

みていさくはなをなか

めむ

蟬丸

花都を

狸々

よをもを尽し(ママ)

(7ウ)

龍田

年毎に

神のみまへに

敦盛

しかる一門かとを並(ママ)

しかるに平家

うとふ

所は陸奥の御国(ママ)

鹿を逐獵師は―

―けることわざをなし、く

やしざよ抑うとふ安かた

のとりくくに品かわりたる殺

生の「中に

疑も夏たつ

(8才)

是をしるしにと

春日龍神

我をしれ

新たく(マ)

花筐

我よりも猶物

源氏供養

すかたに今もかわらねは「た

かひに心を おきもせず ねも

せて

山姥

抑山姥は

小塩

春日野の

(8ウ)

花も忘れし

女郎花

頼風其時に

つゝひて

盛久

有難く

唐舟

陸にはふかくに乗しつゝ、

邯鄲

酌ともく

唱よもすがら

百萬

(9才)

牛羊

実にや世ゝことの

自然居士

かうていの臣下に

外え分

花月

抑此寺は坂の上の田(マ)附丸

絃上

そよや陸奥のちかの塩かまは

里はなれ須まの家居の

されはこそ初より只人

嵐山

しやうの岩屋の松風は

(9ウ)

神楽鼓

雲雀山

年(マ)冬あやまつておもへ

山ふところのうつおきに

須磨源氏

須磨の浦荒面白の海原

熊坂

十六七

小鍛冶

如何にや

鶴亀

庭の砂は金銀の

月宮殿の白衣の袂

(10才)

春栄

けふは殊更最上吉日

なれは高橋か家に伝る

俊成忠度

あれ御覽せよ修羅王の

六浦

月日経てまつ青陽初

秋の夜 八聲

弓八幡

松高き

桑の弓

しかる神功

うつすや

経政

いや雨

(10ウ)

胡蝶

人とはいはて夕暮に

四季

春夏秋

三山

春は年々頃は弥生に

葛城

年ふる雪や

降雪のしもという花の

高間の原

車僧

面白の

七騎落

かくて時日を

(11オ)

藤

おきつ風

ゑひら

山も震動

枕慈童

則此文

まききぬ

しやうく殿(マ)の(マ)

巴

粟汙(マ)にて 偕も義仲

の信濃を出させ

小督

いさくさらは槩の音に

せめてや

小鹿なく さか野

(11ウ)

所を知もさかの山

唐帝の古も

木枯に 引と、むべき

かなわ

あしかれと

いでく

鐘馗

鍾馗及第のみきんにて

岩舟

我ハ又下界にすんで神

を敬て君を守る 秋つ

嶋根の龍神也 或は神代のかれいを移し又は治る御代

に出て寶(マ)に舟を守護し

奉り

(12オ)

ゑいさらくと。おすや

からろのくうしおのみち

くる浪にのつて八大

龍王は南方(マ)に飛行し

御舟のつな手を手にくり

からまき塩にひかれ波に

のつて長ひもめてたき

住吉の岸に寶の御舟

をつけおさめかつも数万

のさ、け物はこひ出すや

心の如金銀珠玉はふり

満て山の如に垂りの浦の

山(マ)は千代迄さかうる御代

とそ也にけり

寶生流謠書拔

THE TOKUGAWA ART MUSEUM

Contents

Articles

- The Wedding of Tsunagimi and Her Trousseau YOSHIKAWA Miho (1)
- The Introduction and Dissemination of Wooden Bear Carvings in Yakumo, Hokkaido:
Focusing on Their Relationship with the Japanese Folk Art Movement
..... ŌYA Shigeyuki and KŌYAMA-HAYASHI Rie (31)

Introduction of Historical Materials

- Noh Manuscripts Written by Tokugawa Yoshikatsu NOMURA Yayoi (73)

Restoration Report

- On the Restoration of the National Treasures: Writing Table with *Hatsune* Motif in *Maki-e*
Sprinkled Gold and Inkstone Box with *Hatsune* Motif in *Maki-e* Sprinkled Gold
..... ITATANI Nozomi (95)

THE TOKUGAWA REIMEIKAI FOUNDATION

8-11, Mejiro 3-chōme, Toshima-ku, Tokyo 171-0031, Japan.
(phone) (03)-3950-0111

THE TOKUGAWA INSTITUTE FOR THE HISTORY OF FORESTRY

address as above.
(phone) (03)-3950-0117

THE TOKUGAWA ART MUSEUM

1017, Tokugawa-chō, Higashi-ku, Nagoya 461-0023, Japan.
(phone) (052)-935-6262

金 鯨 叢 書 第五十三輯 (年一回刊行)

— 史学美術史論文集 —

令和八年 三月 三十日 編集
令和八年 三月 三十日 印刷・発行

編集者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
深 井 雅 海
徳 川 義 崇

発行者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会
電話 (3950) 〇一一七番(代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所
電話 (3950) 〇一一七番(代)

〒461-0023 名古屋市中区徳川町一〇一七
徳 川 美 術 館
電話 (935) 六二六二番(代)

〒605-0089 京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版
印刷所
電話 (533) 六八六〇番(代)